

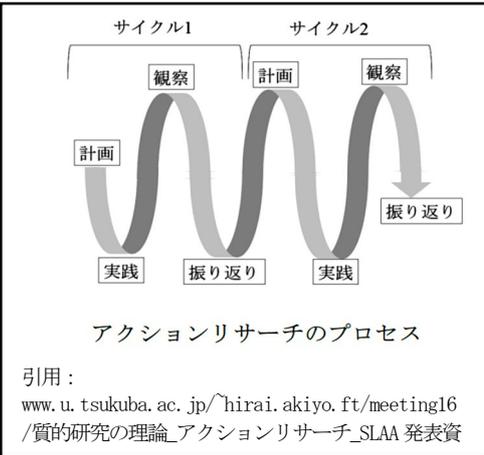
2019年度 独創的研究助成費 実績報告書

2020年 3月 31日

報告者	学科名	看護学科	職名	助教	氏名	川下 菜穂子
研究課題	分娩介助技術習得におけるタブレット型端末を利用した学習効果の検証					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	川下 菜穂子	看護学科・助教	母性看護・助産	統括・調整・データ収集及び分析・成果発表	
	分担者	岡崎 愉加 池田 理恵	看護学科・准教授 看護学科・准教授	助産・母性看護 母性看護・助産	データ収集・分析 データ収集・分析	
研究実績の概要	<p>【はじめに】</p> <p>近年、看護技術の習得として、ビデオのフィードバック機能やタブレット型端末での録画・再生機能を導入した学習が行われており、技術習得に効果があったことが明らかとなっている。そこで昨年度の独創的研究「分娩介助技術習得におけるタブレット型端末を利用した学習効果の検証」を当大学助産師養成課程の4年生を対象に実施した結果、【清潔操作】【産婦への声かけ】【介助時の視線】【介助時の動き】【分娩介助手技】等の効果があったことがわかった。その反面【手本が欲しい】【利用できる機能を増やして欲しい】などの学生のニーズや、【常に教員がいるので必要性がない】【撮影の工夫がいる】などの学外（病院）での利用の課題が明らかとなった。そこで今年度は、昨年度の研究（サイクルⅠ）で得た効果や学生のニーズ・課題を踏まえ、学内での演習を強化した「タブレット型端末を使用した分娩介助技術習得のための学習」を実施・評価し、より効果的な教育プログラムを検証することを目的とした。</p>					

※ 次ページに続く

【研究方法】アクションリサーチ（サイクルⅡ）。調査期間は2019年12月。研究対象は本学助産師養成課程の4年生で、本研究への協力に同意した4名である。方法は次の通りである。なお本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号：18-32）。①昨年度行った研究（サイクルⅠ）で得た結果を伝え、使用方法を共有する。その上で、学内での分娩介助技術の自己学習時にタブレット型端末を使用するように依頼した。②助産実習終了まで学内演習を中心に自己学習を行うときに使用した。③助産実習終了後、インタビューガイドを用いた半構成的面接を実施した。④インタビュー内容の分析は、録音した内容から逐語録を作成し、質的内容分析の手法を用いた。



研究実績の概要

【結果】タブレットの使用状況は表1のとおりである。分析の結果、表2のとおり、学内での分娩介助技術の自己学習時にタブレット型端末を使用した助産学生の反応からタブレット型端末のメリットとして39のコードから6つのサブカテゴリーを生成、2つのカテゴリーに集約した。タブレット型端末のデメリットとしては33のコードを抽出し、5つのサブカテゴリーを生成、2つのカテゴリーに集約した。なお詳細に関しては、現在分析中である。

表1 タブレット使用状況

	平均 (SD) (n=4)	
録画回数	4回	(±0.8)
個人で再生	7回	(±4.2)
他者と再生	6.5回	(±4.2)

表2 学内での分娩介助技術の自己学習時にタブレット型端末を使用した助産学生の反応

	カテゴリー	サブカテゴリー
メリット	学生自身の気づき	清潔操作で物品展開ができる
		安全な分娩介助ができる
		産婦への配慮ができる
		適切な時期に声掛けができる
メリット	分娩介助技術の獲得	卒業生が作成した資料や臨床指導者が行う手技との比較
		分娩介助の一連の流れがスムーズ
デメリット	精神的苦痛を感じる	撮影することでの緊張感
		撮影された自身の姿をみることの嫌悪感
	撮影の限界	反復することでリアリティーが消失する
		うまく撮影できない
		学外でのデータの確認が困難である

成果資料目録

昨年度の独創的研究「分娩介助技術習得におけるタブレット型端末を利用した学習効果の検証」で得た結果をアクションリサーチ（サイクルⅠ）の結果として添付資料として提出する。
川下菜穂子、岡崎愉加、池田理恵：分娩介助技術習得におけるタブレット型端末を利用した学習効果の検証，第60回日本母性衛生学会総会・学術集会（2019.10，千葉）